て語り得るのみである。東京、寶文館發行。定價金七十五錢。（植田壽藏）

論理學（哲學叢書、第四編）　文學士　速水　滉著

思考作用を其の要素に分析し其の原理又は法則を研究する原理論（要素論）を第一篇とし、次に思考の原理、法則を根據として其の實際の應用を論ずる方法論を第二篇に据え、後者を更らに、學術研究の方法を論ずる研究法論と、研究の結果を整理統一して組識的のものと爲す方法を論ずる、統整法論との二部門に區分し、第一、第二兩篇とも其の中に更らに數章數節が設けられて居り、此の外、緒論として『論理學の性質及び其の略史』が有り、附錄として演習問題が添加されて居る。

的確な論理學の素養もない、そして又精讀の暇も得なかつた自分にすら、やゝもすれば、倦怠の情を起し勝ちな斯學をかくまで平易に且つ、面白く讀ませる著者の學殖と老練とを充分に伺ひ得た樣に思ふ。殊に例證の多い事や、演習問題のついておる事などは如何にも適當な思ひ付きだと考へる。『從來の所謂、形式的論理學が餘りに、形式に拘泥して思考の眞相を忘れ、乾燥無味に流れて實用に迂遠な弊を脫し、一面に於て、哲學研究の學徒にとりて其の準備的階梯となり、一他面に於て一般の學問研究者が論理的思索の鍛練を爲すの需用に應ぜんことを志した』と言ふ著者の目的は遺憾なく遂げられたと言へよう。

『論理學は形式的科學であると言ふ故を以て、其の價値の乏しい事を力說するものもあるが是は謬見である、論者の言ふが如くなれば、哲學的思索の如きも、解釋によつては形式的性質を脫し得ないものであるから、無價値のものとなるべきである。著者は、寧ろ形式的であるが故に、一切の學問研究者は其の研究を始むる前に、先づ論理學によつて其の頭腦を鍛練する必要があることを主張する』との著者の主張にも共鳴を感ずる自分は、此の好著が廣い範圍に渡つて多くの讀者を得ん事を望むものである。東京、岩波書店刊行。定價壹圓式拾錢。（深田武）

國際經濟論　服部文四郎著

本書、章を分つこと二十四、前十七章に於て一般理論の敍述を試み、後七章に於て各列强の國際經濟の現狀及び政策を說いてゐる。國際間の經濟關係の密接と頻繁と今日の如くなるに拘はらず、我國に於てなほ未だ一編も此方面（此書の取扱つて居る樣な方面）に關する纏つた研究の公にせられなかつたのは學界の不備であり實際界の不便であつたに相違ない。其缺點を補はむが爲に現はれたる本書が、よし其取扱つたる事項の一部分に限られて居るとは云へ、意義の大なるもののある事は明白である。殊に約七百頁の大編、從ひて叙述は、よし冗漫な嫌はあるにしても、詳細にして懇切である。其上に其行論決して單に乾燥なる空理の上に立たず、常に生きたる實際を捕へ、事實それ自らをして理論を敍べしめたる點は、最も吾人に快い所である、讀者の理解を容易ならしむると共に其確信を强制する力が潜むでゐる。問題の性質にもよるとは云ふものゝ、著者の學殖と實際的智識の豐富とに依らずしては遂げ得難かつた事であらうと思ふ。

本書の內容そのものに關しては、これによりて多大の裨益を受けたと云ふ以外に今何物をも述べる事ができない。或事情の爲に紹介の筆を執つたものゝ、紹介子もとかゝる內容の批評をなす能力も無く、紙面はまた之を敢てすべき適當の場所でもない。たゞ本書の結構又は論理的なる組立に就いて一言して見たいと思ふ。第一に不審に思はれるのは何故に本書を國際放資論と名づけなかつたかと云ふ事である。所說の內容は徹頭徹尾國際放資の外に出でず、而して國際放資が國際經濟現象の一部である事を認めながら、之を名けて國際經濟論と云ふ、地代論を經濟學と云ひ光學を物理學と云ふに同じい、これ狗肉に羊頭を揭ぐるものである、篤學の著者が何故にかゝる名稱を擇んだかを知るに苦しむ、一四—一五頁の所論は一も其辨明とはならないのである。第一章國際經濟の概念の章は寧ろ名實の不一致を自ら論證せむが爲に設けられたるものとしか思へない。序ながら、現代を以て世界經濟の時代に非ずとする論據は如何にも充分だとは思へない、著者は國內に於てさへ所謂生產交換消費の組織が意識的に（スペンサアが意識的協働と云へる場合の意味に於て）立てられてゐない事を顧慮せらるべきであつたと思ふ（六頁參照）。次に述べたい事は全體の組織が幾分散漫を免れない、如何にも緊密な統一を保つて居ると云ひ難い事である。第十八章以下の七章は云はゞ事實の叙述である。勿論中には第二十五章米國の對支經濟關係と日米の衝突の如き第二十二章我國に於ける國際放資の如き第二十章國際經濟上に於ける英國の如き著者の氣焰頗る擧れる部分あるに拘はらず、結局そは他の部分と同一の學組織內に攝取せらるべきものではあるまいと思ふ。こは云はゞ ideographisch の知識である。nomothetisch の知識たる他の部分に對しては精々例示たり例證たる以上の力を有しまい。次に前の十七章に就て見るも叙述は頗る統一を缺いだ憾がある。純理と政策との混和は多數の經濟學者に免れぬ通弊として看過するとしても、十七章の並列には、重要の大小を顧みず、思想展開の順序を度外にしたる點が少くないと思ふ。資本の國民性、外國に於ける製造場の設立と云ふが如きは第六章國際放資の方法の一節を構成す可きものでないかと見られ、第十一章の國際放資の國民經濟に及ぼす影響は第十七章と相聯結して論ぜらるべきものかと見られる。同樣の難點は其他にも少からず存在する事を敢て斷言する。實は著者の如き學者自ら之を覺られざる筈はない、唯執筆の都合からしてこんな體裁を取られた事かと思はれるが、しかしそは用意と細心とを缺いた事ではあるまいか。全體を讀過したる時の印象に前に述べた通りであるが、欲を云へば、餘りに平明に過ぎる部分や重複になつてゐる叙述を省略して、更に緊密な手薄い本となつて居たら一層益が多かつたかと思はれる。先輩の著書に對して妄評を敢てした點に就ては切に著者の寬恕を望む。東京、寶文館發行。貳圓七拾錢。（高田保馬）

實習梵語學

著者荻原氏が先年公にした「梵語入門」はア、エフ、ステンツラー氏原著の譯補であつた、其後氏は「梵語入門」講說の際に感じたる必要に基きて今度その原文の位置を換へ更に若干の文句を增加し又は訂正して出版したのが本書である、で兩書の間別に大な

荻原雲來著